

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

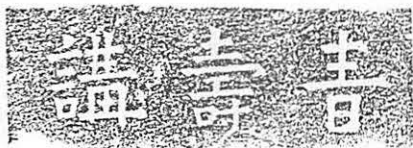
生活文化史

<史料館だより>

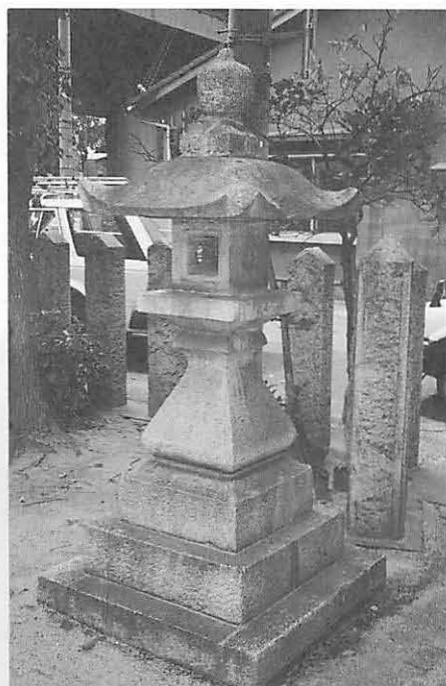
目 次

- ◇再利用された五輪塔—石で出来ているが故の運命—…… 柏原 正民 2
- ◇休止中の『友の会』活動再開に
向けての検討について（中間報告）…… 3
- ◇神戸市東灘区旧本庄村の
神社境内にある石造遺物分布調査報告…… 望月 浩 4

1994.10.15
NO.20



八坂神社所在天保11年銘石灯籠（本誌12P参照）▶
上は台石にある「青壽講」の銘拓影
（採拓・撮影共望月）



神戸深江生活文化史料館

再利用された五輪塔

—石で出来ているが故の運命—

柏原 正 民

先日「私の歴史あんない」で展示した一枚の写真。東灘区本山南町2丁目・小路大町遺跡の発掘調査で見つかった様子である。

画面の真ん中下側には一石五輪塔が横たわり、後ろに見える高まりは19世紀後期の田んぼの畦である。報告書によればこの五輪塔、畦を築く土止めとして使われたと考えられている。

六甲山の南側斜面は、洪水による被害を数多く受けてきた。「一たび雨が降れば川は溢れ、辺りはたちまち水浸しになって……」とはこの地域の自然環境を語るのに、用いられる言葉である。ずいぶん昔から同じ状況が繰り返されて来たことが、この遺跡の発掘調査にも現れているようだ。15〜20回以上を数えることができた土層のなかで、人間の築いた水田と洪水で流れてきた砂が交互につもる様子は、自然の力に対して人間が挑んできた戦いの歴史でもある。高橋川のすぐ近くにあるこの遺跡は、それだけ水の影響を受けやすい土地だったのだろう。

洪水の激しい土地に造られる田んぼの畦には、木の杭を列状に打ったり、矢板で囲むといった工夫が見られる。土を盛り上げ固めただけでは、ちよつとした水の力にも負けてしまうし、湿った土では硬くならず、歩くと沈むことがあるからだ。この畦でも五輪塔のほか、石をいれて補強がなされていた。

さてこの高橋川の下流には、たくさんの一石五輪塔を祀った「踊り松地蔵」がある。この石造遺物は、高橋川の河川改修で見つかったものと伝えられる。もともと墓石として造られ、当然信仰の対象とされていたであろうから、簡単に打ち捨てられたとは考え難い。むしろ洪水などで、上流から流されてきた可能性が高いのではないだろうか。

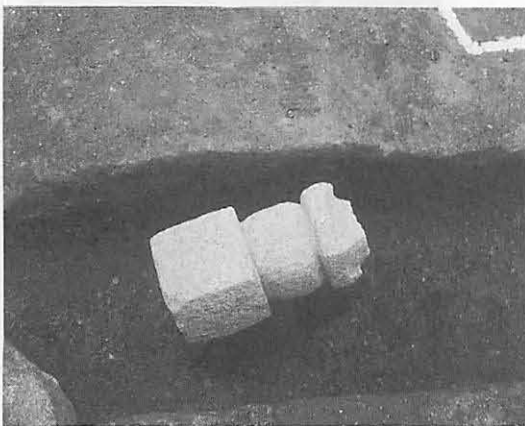
小路大町遺跡の五輪塔は、本来の用途が忘れ去られた姿である。石造遺物を足で踏みつける訳であるから、当然信仰のにおいはない。流れてきた五輪塔を拾って使ったとも考えられる。望月浩氏のご教示によれば、踊り松地蔵の石造遺物は室町時代後半のものが多くこのことで、小路大町遺跡の五輪塔と時期的に一致する。高橋川周辺にはまだ多くの五輪塔が、人知れず眠っているのであるか。

この地域では中世の墓地は確認されていないが、川沿いで洪水の被害をうけた墓石が確認される点から見れば、近くに墓地等があった可能性を暗示しているようにも思える。

本稿を書くにあたり、当地の石造遺物について望月浩氏に多大なご教示をいただいた。文末ながら深く感謝いたします。

《参考文献》

長谷川真^か『小路大町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会



一石五輪塔出土状況（調査報告書より）

休止中の『友の会』活動再開に

向けての検討について（中間報告）

一、「友の会」の活動が休止に至った事情

平成五年八月二十九日に開かれた「友の会」臨時総会において、小嶋悦郎会長より、次のような三つの理由で辞任したい旨の表明があった。

- ① 会長在任が当初より十三年間にわたる長きに及んだため、活動がマンネリ化した。
 - ② 自宅及び勤務先から史料館までの距離が遠い上に、現職の責任が重くなって多忙となり、時間を割くことが難しくなった。
 - ③ 「友の会」発足当初における所期の目的はすでに達成された。このことについては、平成四年初めの「友の会」幹事会に小嶋会長から申し出があり、その時点では、とりあえず副会長三名を選任して、それまで会長一人で処理してきた業務の分担をはかり、一年後を目途に、小嶋会長が辞任した後、副会長の一人が会長を引き継ぐこととなっていた。
- ところが、現実には副会長のなり手がなく、小嶋会長の要望は宙に浮いたまま日時が経過したので、このままでは「友の会」活動の継続は困難であるとの判断により、臨時総会に今後の運営方針を委ねることとなったのである。

臨時総会における審議結果の詳細については全会員に報告された通りであるが、小嶋会長の辞任はやむを得ないとして承認され、結

論として次のようにまとめられたので、報告書の「まとめ」だけをそのまま再掲する。

- ① 小嶋会長辞任にともない、友の会活動は休止する。
- ② 友の会事務局を神戸深江生活文化史料館に預ける。
- ③ 来年一年の猶予期間の間に友の会再出発について検討する。
- ④ 友の会発行『友の会通信』は、第42号（平成五年三月発行）で打ち止めとする。

⑤ 再出発までの情報連絡は、史料館発行『生活文化史』で行なうものとする。

⑥ 再出発については史料館館長に一任する。

なお、活動休止にともない、事務局では活動再開まで会費を徴収しないこととした。

二、「友の会」活動再開に向けての検討状況

「友の会」活動休止を決定した臨時総会の結論に基づき、史料館では館員一同による討議を重ねてきたが、ほぼ次のような方針で再開に向けて準備を開始することとなった。

- ① 「友の会」は従来通りの名称をそのまま継承する。
- ② 新会長は、史料館理事または現「友の会」幹事の中から選任する。
- ③ 史料館館長が「友の会」事務長として統括する。
- ④ 活動については、これまでの実績にとらわれず、史料館後援組織としてふさわしい行事を検討すると共に、『生活文化史』などの内容充実と定期刊行を重点目標とする。
- ⑤ 会計年度はこれまでのような暦年によらず、4月から翌年3月までとし、再開は平成七年度からとする。
- ⑥ 活動再開に際しては、新たに「友の会」規約を作成した上で全会員に周知すると共に、会員継続の有無を照会し、確認する。

神戸市東灘区旧本庄村の

神社境内にある石造遺物調査報告

史料館主任研究員 望月 浩

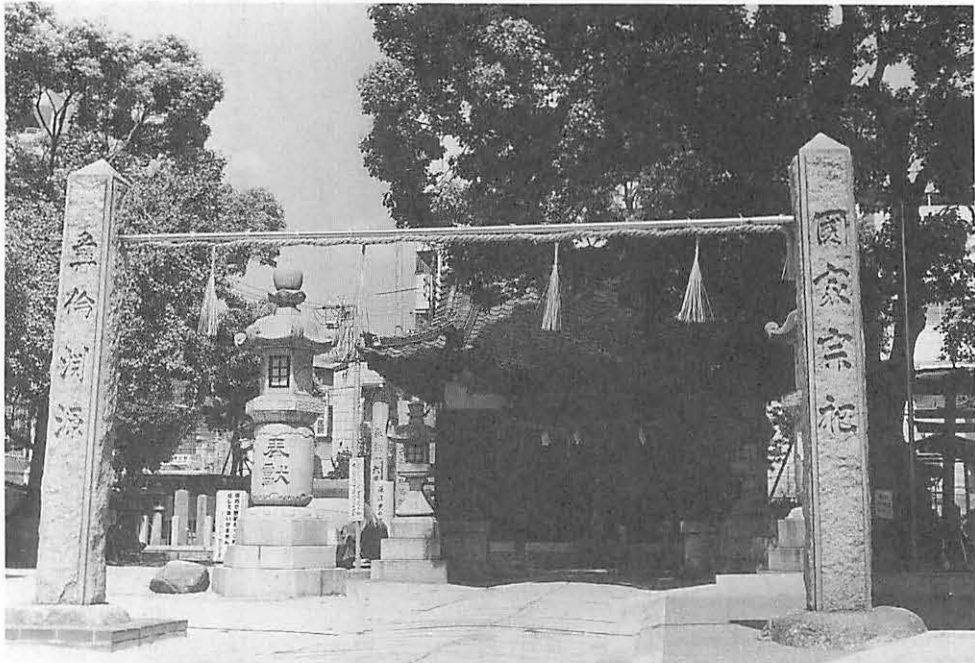
一、はじめに

前号で、神戸市東灘区深江地域の路傍の石造遺物の調査報告を行なった。最終的には、旧本庄村の石造遺物の調査結果を報告する予定である。その成果は、本誌上に随時発表していきたいと思う。今回は、旧本庄村に所在する三つの神社内に見られる石造遺物の報告を行ないたい。掲載の写真はいずれも、史料館研究員の藤川祐作撮影によるものである。

旧本庄村は、深江・青木・西青木の三つの村から構成され、それぞれの村に村社が存在した。すなわち深江(大日靈女神社)・青木(八坂神社)・西青木(春日神社)である。昔から、村人の心の拠り所として祀られてきた。そのため、さまざまな寄進碑等の石造遺物を見ることができるといえる。

二、大日靈女神社境内の石造遺物(深江本町三丁目五)

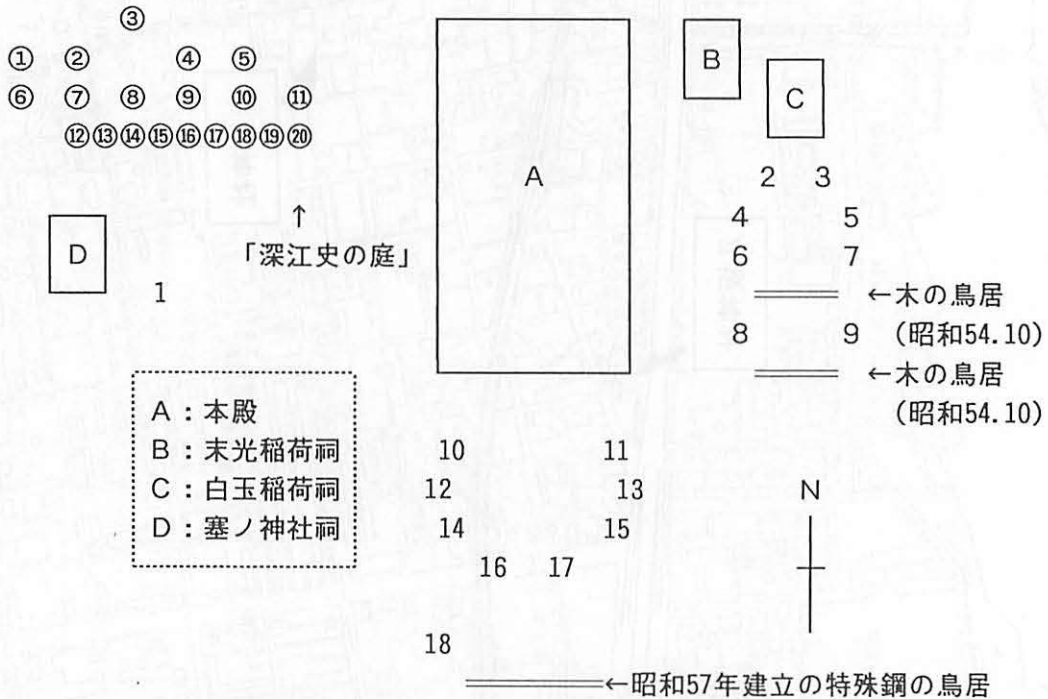
通称大日ツアン。文明十三(一四八一)年に、深江にあった葉王寺の住職観空が蓮如に帰依し、真言宗であった寺を浄土真宗に改宗した。その時に本尊も、大日如来から阿彌陀如来に改めたため、寺から出された大日如来を村人がお祀りしたのが創建だと言われている。他にも、白玉・末光稲荷や、塞ノ神社、浜にあった戎神社も合祀している。また、本殿西に「深江史の庭」として、記念碑や石碑を集めている。



大日靈女神社



<大日靈女神社境内石造遺物配置図>



- | | |
|--------------------|----------------|
| ① 植樹記念碑 (昭和12年) | ⑳ 寄進碑 (平成5年) |
| ② 玉垣寄付芳名録碑 (大正11年) | 1 手洗石 (昭和27年) |
| ③ 元戎社の鳥居 (大正3年) | 2 狐像 (昭和51年) |
| ④ 奉献者芳名録碑 (昭和9年) | 3 狐像 (2と一対) |
| ⑤ 鳥居の柱 (昭和9年) | 4 石灯笼 (文化11年) |
| ⑥ 記念植樹碑 (明治37、8年) | 5 石灯笼 (4と一対) |
| ⑦ 石橋の基礎石 (正徳2年) | 6 手洗石 (明治9年) |
| ⑧ 鳥居再建記念碑 (昭和57年) | 7 百度石 |
| ⑨ 里謡記念碑 (昭和62年) | 8 石灯笼 (大正12年) |
| ⑩ 奉賛者芳名録碑 (平成4年) | 9 石灯笼 (8と一対) |
| ⑪ 社名碑 (昭和9年) | 10 狛犬 (大正13年) |
| ⑫ 石灯笼の竿 (元禄7年) | 11 狛犬 (10と一対) |
| ⑬ 石灯笼の竿 (享保11年) | 12 石灯笼 (明治41年) |
| ⑭ 玉垣の一部 (大正11年) | 13 石灯笼 (12と一対) |
| ⑮ 玉垣の一部 (大正11年) | 14 石灯笼 (大正11年) |
| ⑯ 献木者芳名録碑 (昭和12年) | 15 石灯笼 (14と一対) |
| ⑰ 寄進碑 (昭和59年) | 16 石柱 (大正元年) |
| ⑱ 神楽橋記念碑 (明治40年) | 17 石柱 (大正元年) |
| | 18 手洗石 (大正8年) |

まずは、ここに集められている石造遺物を紹介していきたい。なお各遺物に付けられた番号は、配置図の番号に対比する。

① 植樹記念碑

自然石の裏表に文字が刻まれている。高さ一〇〇cm。表には「商和會記念樹」、裏には「献木 昭和十二年三月 楠 六本」と刻まれている。「商和會」とは、深江の商店主の団体のことである。花崗岩製。

② 玉垣寄付芳名録碑

高さ一六二・五cm、左右二一一cm、幅二四cmを測る板状の石に、表に玉垣寄付芳名録として、寄付者の名前が碑面一杯に刻まれている。裏面には、左方の表面を研いて、「大正拾一年五月建設」とあり、発起人八名と相談役二人の名前が刻まれている。この大正十一年に、神社の回りに建てられた玉垣は、昭和二十年八月六日の空襲で破壊され、一部が本殿西側の「深江史の庭」に残されている。

③ 元戎社の鳥居の柱残欠

二本残されており、向かって左側の表面に「奉」、裏面に縦書きで「大正三年九月建之」、右側の表面に「納」と刻まれている。元は、深江南町三丁目にあった戎社の境内に建てられていた。その時と左右が入れ替わっている。平成五年に、大日神社に合祀され、鳥居も柱の一部だけ詠が現在地に移された。

④ 皇太子殿下御誕生記念鳥居建立の奉献者芳名録碑

表面を研いた板状の青石である。昭和九年五月に、当時の皇太子の誕生記念に鳥居を建立し、その奉献者の名前を表面に記している。裏面には「昭和九年五月」の文字が見られる。

⑤ 皇太子殿下御誕生記念鳥居柱残欠

昭和九年五月に、当時の皇太子の誕生記念に建立された鳥居の柱部分。花崗岩製。二本建てられていて、向かって左側の柱の正面に

縦書きで「奉獻昭和九年五月吉日建之」、右側正面に「皇太子殿下御降誕奉祝記念」と刻まれている。

⑥ 記念植樹碑

高さ六十三cm、幅八十七cmの自然石の表面に、縦書きで四行にわたり「奉公義會 明治三十七 八年之役凱旋記念樹」と刻まれている。明治三十七、八年の日露戦争凱旋の記念に植樹をし、その時に碑を建てたもの。花崗岩製。

⑦ 高橋川の石橋の基礎石

石の表面は研かれていて、次の文字が刻まれている。「奉寄進 石橋 正徳二壬辰歲 四月八日（日は異体字を彫っている） 深江村喜治郎」。左右は二一〇cm、高さ四十四cm、奥行き四十九cmを測る。この礎石には伝説が残されている。簡単に述べると、江戸中期に深江村の網元喜治郎が、不漁続きでよその土地へ行こうとしたところ、高橋川にかかる橋（高橋）の上で、浜の方で大漁で賑わう光景を見た。そこでもう一度村に戻り頑張ってみると、その後大漁が続いた。喜治郎は、正徳二年に自分を呼び止めてくれた橋を、木製から石橋にかけかえた。その後、



高橋川の石橋の基礎石

昭和の初めに改修されるまで使われた。その時記念に残されたのが、この礎石である。上部と背面にはノミ加工の跡が見られる。花崗岩製。

⑧ 大鳥居再建記念碑

黒い御影石でできた板状の碑で、昭和五十九年に建てられた。表面に銅版を張り、昭和五十七年に建てられた鳥居の寄進者が書かれている。

⑨ 深江の里謡の記念碑

昭和六十二年に建てられたもの。表面に「深江こへたら大日如来たかい高橋踊り松 てう子が池に片葉葎」という、江戸時代の深江村の情景をうたった唄を記している。裏面には、「この里謡は森稲荷神社の神輿をかつぎつつうたっていた。大日如来は今の大日霊女神社で、西国街道(浜街道)が深江村の中を通りすぎた現在地にあった。踊松は高橋川の高橋を渡った右岸沿いに多く植わっていた。踊松の南に葎が茂る「てう子が池」があつて弘法大師が手を洗われ、川尻に蚊封じをされて一夜寝られた場所があり、その後蚊が発生しなかつたと伝えられている。」という説明が書かれている。

⑩ 子供神輿奉賛者芳名録碑

平成四年に建てられたもの。御影石の表面に銅版を打ちつけ、昭和五十九年にできた子供神輿の奉賛者が書かれている。

⑪ 社名碑

昭和九年に建てられた旧大日霊女神社社名碑。平成四年に現在の社名碑が建てられたので、ここに移動されている。角柱で、花崗岩製。正面に「大日霊女神社」、裏面に「昭和九年五月吉日建之」と刻まれている。

⑫ 元禄七(一六九四)年銘の石灯籠

元は、境内本殿前に一対であったが、現在は一基のみ竿の部分を残している。他の部分は、昭和五十七年に別石で補修されている。



竿の部分は高さ七十一cm、直径二十二cmを測る。竿には節はなく、正面に縦書きで、「元禄七甲戌年 奉寄進御寶前 六月吉日 堂村中」とある。旧本庄村で一番古い紀年銘を持つ石造遺物である。赤味がかった花崗岩製。

元禄7年銘の石灯籠(竿) 左:拓影(13%に縮小)

⑬ 享保十一（一七二六）年銘の石灯笼

元は、境内の本殿より東南部にあった。先の元禄七年銘の石灯笼と同じく、竿の部分だけが残されており、他の部分は昭和五十七年に補修されている。白っぽい花崗岩製で、竿の部分の高さ七十一cm、直径二十四cm。元禄七年銘石灯笼の竿とほぼ同じ大きさである。正面に縦書きで、「奉献上 享保十一年 丙□六月 日」と刻まれている。



享保十一年銘石灯笼（竿）
拓影（14%に縮小）

⑭ 玉垣の一部

大正十一年に建立された玉垣の一部。花崗岩製で、現高一四三cm、幅三十五cm。頭部は曲線を描いた山型。表面に「一金百五拾圓（吉野川浅吉以下寄進者12人の名）」が刻まれている。寄進者はいずれも深江の村相撲の力士の名前である。

⑮ 玉垣の一部

⑭と同じく大正十一年に建立された玉垣の一部。花崗岩製で、現高一二五cm、幅二十四cm。形は⑭と同じ。表面に「一金壹百圓 大峯山 深榮講」と刻まれている。「深榮講」は、深江にあった講組織で、大峯山に男性が詣る行事であった。

⑯ 商和會記念樹献木者芳名録碑

高さ一三八cm、幅二十七cmで、花崗岩製の板状の石碑。昭和十二

年に商和會（深江の商店主の団体）が楠を記念樹として献木したときに、献木した人（二十四人）の名前を表面に記している。

⑰ 寄進碑

⑭と同形の碑で、花崗岩製。昭和五十九年に子供神輿と史料館に運営基金を、三角やすという人が寄進したことを示す碑。

⑱ 神楽橋記念碑

四角柱の花崗岩製で、頭部は角錐になっている。総高四十九cm、各面の幅は正面と裏面が三〇・五cm、左右の面が二十九cm。正面に「神楽橋」（楽と橋の字は草書体）、裏面に「明治四十年八月架之」と刻まれている。神楽橋は、明治四十年に津知川に架けられたもので、深江南町一丁目付近にあった。そこには現在、「津知川神楽橋の跡」と書かれた石碑が建っている。深江南町一丁目は町名改正以前は、神楽町と呼ばれていて、古くは神楽新田という地名もあった。津知川は、神楽町の西側を流れていた。

⑲ 寄進碑

⑭と同形の碑で、花崗岩製。平成元年に白玉・末光稲荷の改築費を、久保マサエという人が寄進したことを示す碑。

⑳ 寄進碑

⑭と同形の碑で、花崗岩製。平成五年に大日神社に運営基金を、吉井キクエという人が寄進したことを示す碑。

1 手洗石

元、戎社にあった物。花崗岩製。自然石の上部を掘り窪め、水穴としている。水穴の縁は二段になっていて、内法の測定値は三十×四十八cmを測る。全体の法量は、一〇〇×六十五cm×高さ四十cmである。側面に右から「奉納」と刻まれ、これが正面で、裏面に縦書きで「昭和廿七年 中尾實（以下不明） 同道（以下不明）」と、年号と寄進者の名前が見られる。

2 狐像

白玉稲荷の社の前にある。昭和五十一年に奉納された。台石の高さは五十五cm。台石の上には、丸彫りの狐像が置かれている。像高は三十六cm。狛犬の代わりに、稲荷神の使いの動物である狐を奉納している。

3 狐像

2と一对の物。

4 文化十一(一八一四)年銘の石灯籠

総高一八六cm。花崗岩製。火袋だけ、後補されている。竿は四角型で、節はない。上部でくびれていて、下部は裾広がりになっている。この形は、江戸時代には、俗に神前型と呼ばれる神社奉獻用と



文化11年銘石灯籠・左：年号銘拓影(25%に縮小)

して、普遍的に見られる。基礎は二段になっており、蓮弁は見られない。笠の軒は中央で薄く、軒下は水平である。竿の正面には「常

夜燈」と刻まれ、向かって右の側面には「文化十一甲戌年」、左には「六月吉日」と刻まれている。基礎の部分の背面に文字があるようだが、風化のため判読不能。

5 文化十一(一八一四)年銘の石灯籠

4と一对の物。

6 手洗石

花崗岩製で、上部に楕円形をした水穴があり、その内法は五十六×二十四cmを測る。全体の法量は、八十二×三十六×高さ五十一cmである。側面の前方に縦書きで「奉納」(奉は草書体)と刻まれ、背面には縦書きで「明治九 子二月 周旋人 龍ヶ浜喜三郎 青木源兵衛 池田伊之助」と刻まれている。「周旋」は、事をなすために立ちまわることや世話をすることの意である。なお「龍ヶ浜」という人物の先祖と思われる文政六年銘の墓(力士墓)が、本庄共同墓地内に存在する。

7 百度石

高さ一一四cmで、花崗岩製。新しいものであるが設置年不詳。百度石は、百度詣りの起点の標石で、これを起点とし、社殿の前に行き拝礼して、この石まで戻って一回と数えた。

8 大正十二年銘の石灯籠

基礎は二段からなり、竿・火袋とも四角型。火袋の火口には木枠のガラスがはめこまれている。花崗岩製で、総高は二〇二cm。竿の正面には縦書きで「奉納」、背面には縦書きで「大正十二年七月吉辰」と刻まれている。

9 大正十二年銘の石灯籠

8と一对の物。

10 狛犬

台石は花崗岩製で、高さ八十九cm。正面に「猷」、背面に縦書きで「大正十三年三月 岡田正蔵 全いく」と刻まれている。台石の上には、和泉砂岩製の狛犬がのつており、狛犬の下部側面に縦書きで「大阪 川島三平刻」とある。地元の石工が台石を作り、狛犬は和泉の石工に依頼したものであろう。俗に「大阪狛犬」と呼ばれる形をしている。高さは八十五cm。

11 狛犬

10と一对の物。台石の正面には「奉」の字が刻まれている。

12 明治四十一年銘の石灯籠

花崗岩製で、高さは二六五cm。基礎は三段になっており、竿・火袋とも四角型。全体に2・3と同形式で、神前型。竿の正面に草書体で「猷燈」、向かって左面に縦書きで「明治四十一年五月吉日」と刻まれている。

13 明治四十一年銘の石灯籠

12と一对の物。竿の向かって右側の面に縦書きで「明治四十一年五月吉日」と刻まれている。

14 大正十一年銘の石灯籠

花崗岩製で、総高三八〇cm。基礎は三段からなり、六角型。基礎の上部には複弁の反花が見られる。背面には岡部鶴太郎他七人の寄進者の名前が刻まれている。竿は円柱で、正面に「奉猷」、背面に縦書きで「大正十一年十二月」と刻まれている。火袋は六角型で、火口には木枠のガラスがはめこまれている。火口のない面には、鹿などの彫刻がほどこされている。火袋の下の中台にも文様が彫刻され、中台の下部には蓮弁が見られる。笠には、六つの降り棟があり、それぞれその先端に蕨手がある。

15 大正十一年銘の石灯籠

14と一对の物。基礎の背面に、松尾與吉他七人の寄進者の名前と「岡崎市 石工 杉田菊」と石工名が彫られている。岡崎は花崗岩の産出地でもあり、石製品も数多く製作されていた。特に石灯籠は有名である。

16・17 石柱

参道に二本の角柱が立っており、向かって右の柱の正面には「国家宗祀」、背面に「松井善太郎 松井榮蔵」とあり、左の柱の正面には「幣倫溯源」、背面には「大正元年十二月建之」とある。柱と柱は上部で、鉄棒が差し渡されている。その鉄棒に絡むように注連縄が付けられている。総高はそれぞれ台石を除いて、二八六cm。

18 手洗石

花崗岩の自然石の上部に円形の水穴があり、内法の直径は六十五cmを測る。縁は二段になっている。側面前方には横書きで「納奉」とあり、背面に縦書きで「大正八年七月 松本ふさ子」とある。高さは一〇八cm。

三、八坂神社境内の石造遺物（青木五丁目）

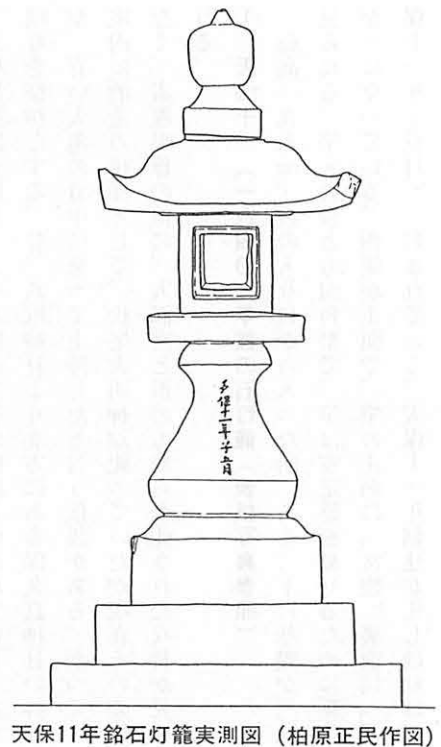
八坂神社は天保十一（一八四〇）年の創建といわれている。素盞鳴尊を祭神とする。昔、八坂神社より北方にある保久良神社の神様が、青い大亀の背中に乗って上陸したと言う伝説がある。かつては境内に酒造の神様として、松尾大明神が祀っていたが現在その姿はなく、素盞鳴尊の他に、天満宮と浜の方から合祀された戎神が見られる。

① 天保十一（一八四〇）年銘の石灯籠（表紙写真参照）

総高一九七cm。西の入り口から入った所にある。下に基礎が三段見られる。竿・火袋とも四角型で、竿は安定感を見せるために裾広がりになっている。西側が正面で、竿の正面に「常燈」裏面に「天保十一年子五月」と刻まれている。天保十一年創建が正しければ、



八坂神社



天保11年銘石灯笼実測図 (柏原正民作図)

神社創建の時に建てられたものである。竿のすぐ下の台石正面に「青（灯笼に刻まれている文字は月ではなくて日になっている）壽講」と刻まれている。火袋は正面と裏面に四角い火口が見られ、側面は丸い窓が見られる。青壽講は、漁業関係者の間で行なわれていた講という話が残っているが、文献では見られない。花崗岩製。

② 天保十一（一八四〇）年銘の石灯笼

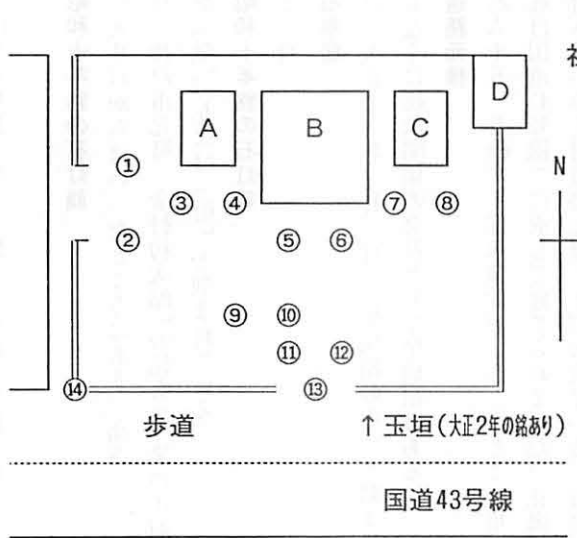
①と一対。

③ 石灯笼

総高一六六cm。天満宮の社殿前にある。円形の反花のある基礎の上に乗っていて、竿も円柱である。竿の中間には節が見られる。火袋は六角型で、前後二面に火口があり、他の面は丸い窓と模様を陽刻している。中台には下端に複弁の請花がある。軒に見られる蕨手は、江戸時代特有の緞帳を釣り上げた結びのような形である。竿の正面に「常燈」と刻まれている。向かって右の塔の竿の背面に、文字が刻まれている。風化で読み取れない。花崗岩製。

④ 石灯笼

<八坂神社境内石造遺物配置図>



- 社殿
 - A 天満宮
 - B スサノオの命
 - C 大物主命・戎神
 - D 社務所
- ① 石灯笼 (天保11年)
- ② 石灯笼 (①と一対)
- ③ 石灯笼 (江戸時代か?)
- ④ 石灯笼 (④と一対)
- ⑤ 狛犬 (昭和10年)
- ⑥ 狛犬 (⑤と一対)
- ⑦ 石灯笼
- ⑧ 石灯笼 (⑦と一対)
- ⑨ 旗の記念碑 (昭和8年)
- ⑩ 手洗石 (天保年間)
- ⑪ 石灯笼 (昭和10年)
- ⑫ 石灯笼 (⑪と一対)
- ⑬ 石鳥居 (大正13年)
- ⑭ 道路元標 (大正か?)

- ③と一対。
- ⑤ 狛犬
総高一六五cm。狛犬本体は七十六・五cm。台石に「昭和十年五月」「中西停 同志ゆう」と刻まれている。大阪型。花崗岩製。
- ⑥ 狛犬
⑤と一対。
- ⑦ 明治九年銘の石灯笼
総高一三三cm。竿の正面には「獻燈」と刻まれている。右面には「明治九年九月吉日建之」、背面には「願主 上坂重助」と刻まれている。竿に節は見られない。基礎部分は、地面に埋もれている。竿は四角柱で、火袋も四角である。中台には装飾は見られない。浜にあつた戎神社が八坂神社の境内地に移されたときに、建てられたものと思われる。花崗岩製。
- ⑧ 明治九年銘の石灯笼
⑦と一対。
- ⑨ 旗の記念碑
高さ一七〇cm、幅三十三cm。青木青年団創立七周年の記念に建てられたもの。「昭和八年二月十一日」の銘文あり。
- ⑩ 手洗石
正面に「船仲間」背面に「天保十(以下不明)」の銘「子(以下不明)」の銘



手洗石

文あり。高さ四十四・五cm。漁業関係者の奉納したものとと思われるので、①の石灯笼と同じ天保十一年に、奉納されたものか。花崗岩製。

⑪ 昭和十年銘の石灯笼

南の入り口からはいったところにある。高さ二三〇cm。「昭和十年五月 神戸市元町 金村初次郎」の銘あり。竿の正面には、向かって右が「獻」、左には「燈」と刻まれている。

⑫ 昭和十年銘の石灯笼

⑪と一対。

⑬ 石鳥居

竿に「大正十三年三月一日」「早駒組若中」と刻まれている。現在でも近くに建設関係の会社として早駒組はある。

⑭ 道路元標

総高六十五・五cm。上部は蒲鉾形。もともとこの場所の旧浜街道（現在は国道43号線）に面して建てられていた。花崗岩製で、正面に縦書きで「本庄村道路元標」と刻まれている。道路元標の説明は、『生活文化史』No.17「旧本庄村の道路元標」を参照。

四、春日神社境内の石造遺物（北青木四丁目二〇）

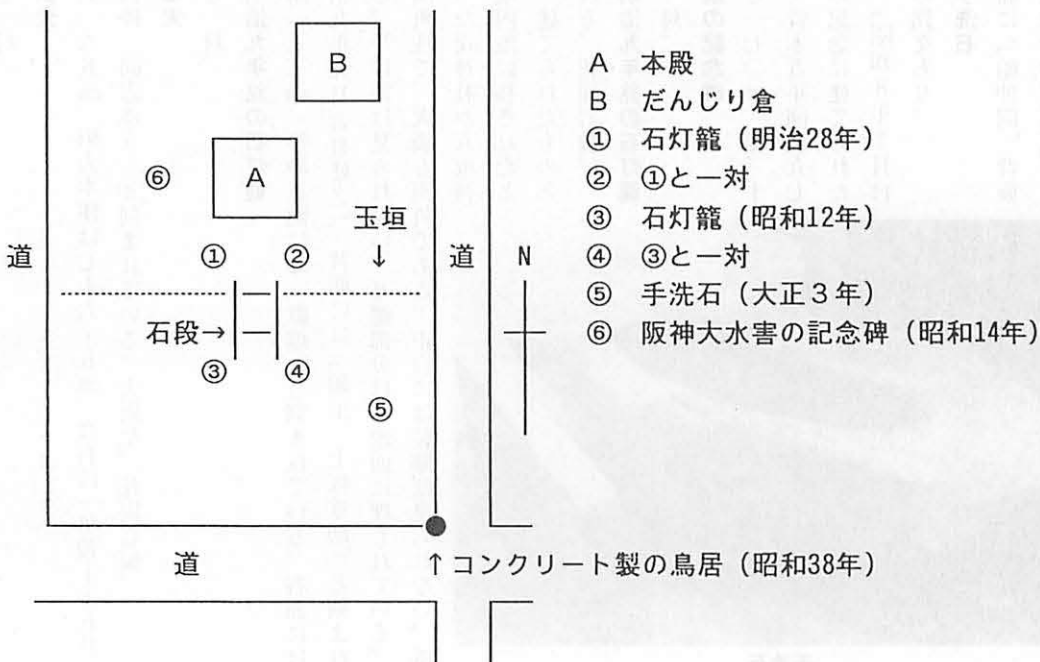
春日神社は、祭神は天児屋根命。縁起はよくわかっていない。本源は、奈良の春日大社で藤原一族の氏神でもある。かつては全国に社領があったといわれているので、ここもその社領の一部であったかも知れない。または藤原氏の荘園でもあったか。

境内には、戦前から伝わるだんじりが、だんじり倉に保管されている。

① 明治二十八年銘の石灯笼

高さ一九三cm。花崗岩製。基礎は二段になっており、上段正面に右から「氏子中」と刻まれている。竿は四角型で、末広がりになっ

<春日神社境内石造遺物配置図>





春日神社

ている。正面に「常夜燈」、東面に「明治廿八年八月建之」と刻まれている。火袋は四角型で、正面と裏面に四角い火口がある。側面には丸い窓がある。

② 明治二十八年銘の石灯籠

①と一対。基礎上段の西面に「世話人 中田太左門 前田吉三郎 榎谷□兵衛」と刻まれている。

③ 昭和十二年銘の石灯籠

高さ十四cmの丸い台石の上ののっている。高さ二〇七cm。竿は円柱で、中間に節が見られる。火袋は六角型で、正面と裏面に四角い火口がある。竿の正面には「奉燈」、裏面には、「昭和十二年五月」「横屋土地區劃整理組合」と刻まれている。花崗岩製。

④ 昭和十二年銘の石灯籠

③と一対。

⑤ 手洗石

高さ四十五・五cm。上面の長さ一三八cm。花崗岩製。正面に「奉納」、裏面に「大正三年」と刻まれている。旧本庄村にある手洗石は、その名称が書かれていない（水盤・盥・手水鉢など）。

⑥ 阪神大水害の記念碑

昭和十三年の阪神大水害の時に、流れてきた巨石を利用してたてた記念碑。表面の自然面には「水災復興」「記念」と刻まれ、裏面は石の表面を研いており、当時の被害状況などが記されている。昭和十四年七月五日に建てられた。

以上、総数は五十八基（一対の物も別個に数える）。石灯籠がもつとも多く、二十二基を数える。一番古い紀年銘を持つ石造遺物は、元禄七（一六九四）年の石灯籠の竿で、江戸時代の紀年銘を持つ石造遺物は八基である。

御影石の産地に近いが、地元の石工名は銘文に見られなかった(岡崎と大阪は各一例ずつ見られる)。しかし、ほとんどの石造遺物の材質が花崗岩であるため、やはり地元で作られたものが多いのであろう。

他地域でよく見られる近世の石造遺物の内、念仏・巡礼・庚申・日待ちなどの信仰・供養に関するものがほとんど見られなかった。今後周辺の調査を進めて、論究してみたい。

他地域の調査報告ではあまり取り上げられない、明治以後の石造遺物も取り上げた。しかし多くの石造遺物は、その地域に住む人々の古くからの信仰の対象となったものである。また旧本庄村は空襲や災害で、文献資料が少なく、石造遺物に刻まれた金石文も貴重な資料となりうる。特に第二次世界対戦以前の物は、空襲禍にもかかわらず現存しているため、今後も保存に努めなければならぬ。

今回の報告は、はなはだ簡単なものであるが、地域の歴史の解明に少しでも役立てれば幸いである。

最後になったが、本報告にあたっては、藤川祐作・柏原正民両氏の多大なご協力を得た。また、志井保治氏からはご教示をいただいた。記して感謝します。

参考文献

- 『兵庫縣神社誌』／兵庫縣神社職會編纂／兵庫縣神社職會
 『日本の石燈籠』／近藤豊監修・福地謙四郎著／理工学社
 『日本石仏事典』／庚申懇話會編／雄山閣出版
 『武庫郡誌』／武庫郡教育會／武庫郡教育會
 『東灘歴史散歩』／田辺眞人著／東灘区役所
 『ザ・ひがしなだ』／道谷卓・望月浩・望月友二編著／神戸深江生活文化史料館友の會

●訂正とお詫びと感謝

前号の「神戸市東灘区深江地域の路傍の石造遺物分布調査報告」の中で、10Pの上段、後から2行目「阪神深江駅西踏切北東角」↓「阪神深江駅西踏切北西角」、11Pの下段、前から2行目、「東灘小学校南東角J R 沿い」↓「東灘小学校東角阪神電車沿い」というようにまちがっていました。訂正し、お詫び申し上げます。お恥ずかしいかぎりですが、このまちがいについては、実際に前号を持って石造遺物を見て回られた方からご指摘を受けたものです。本当にご指摘ありがとうございました。

●編者より

本号で20号。今まで本誌に執筆された方・編集してくれた方・ご支援くださった方・愛読された方・どうもありがとうございました。今後もよろしく願います。この秋には、特別展「打出焼」を開催します。ご来館お待ちしております。また、本誌に対するご感想をお寄せ下さい。

『生活文化史』第20号 94・10・15

編集／望月 浩

発行／神戸市深江生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-7

☎ 078-453-4980